市民の暮らしやすさ指標

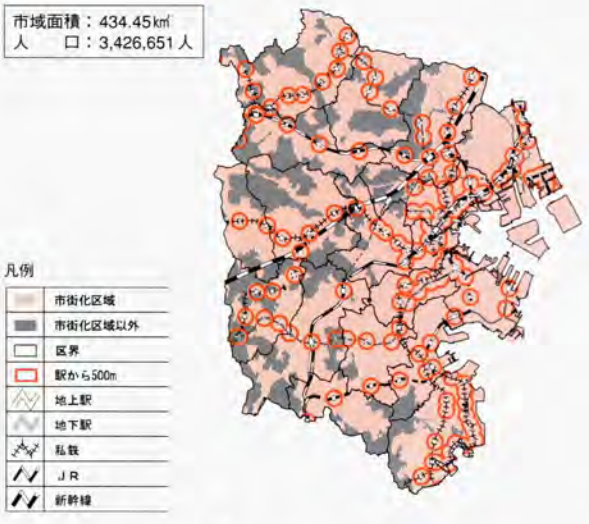
利便性とうるおいが両立するまち

1章（P18）で触れたように、市民の居住環境に対する満足度の最も高いのは、「交通の便利さ」、ついで「ふだん買い物をする場所の近さや便利さ」であった。また、「周辺の静かさ」「緑や自然の豊かさ」についても満足している市民は多い。地域による差があるものの、横浜市は便利さと同時にうるおいの両方の要素を提供できる環境を持っていることになる。これは地形的特質と都市計画によるところが大きい。

横浜市の市街化区域を他都市と比較すると、市域内に市街化調整区域が島状に分布し、横浜駅を中心に鉄道網が放射状に形成され、特徴的な形態をしていることがわかる（下図参照）。これに対し、大阪市や名古屋市は市域のほとんどが市街化され碁盤の目状の鉄道網がひかれており、仙台市や札幌市、京都市では、市街地が市域の中心部にある既成市街地集中型となっている。横浜市の市街化区域が都市計画区域に占める割合は約76％で、市街化調整区域も比較的多く残されていることに加え、谷戸や丘が多いという複雑な地形により、とくに郊外部には市民生活の身近な場に緑が存在し、斜面の緑が眺められるという「緑や自然の豊か」な環境が散在しているのである。また、鉄道網や道路網の発達により、市民は郊外部に残されている多くの緑地と、都心や副都心に集積の進んできた文化・商業施設・アミューズメント施設の両

●都市における市街地の形態

●横浜市



●大阪市

●仙台市

資料：面積は大都市比較統計年表
人口は平成12年国勢調査

方への移動がしやすく、都市の利便性とうるおいを兼ね備えた都市としての環境が整ってきたといえよう。

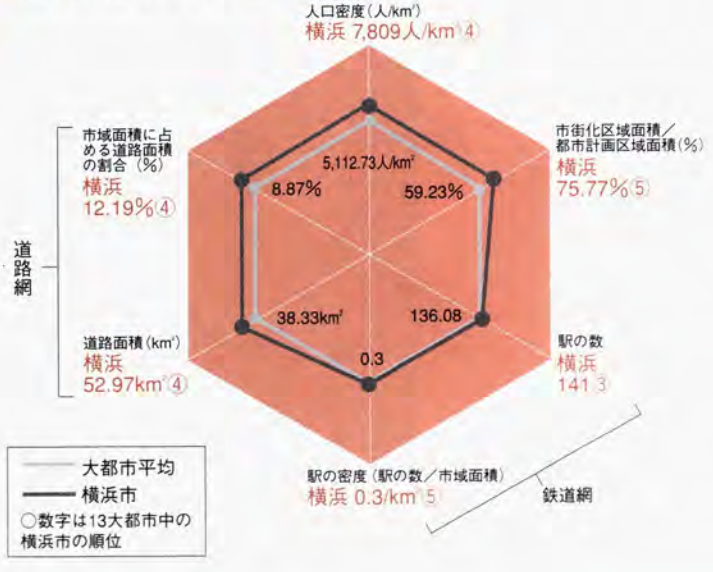
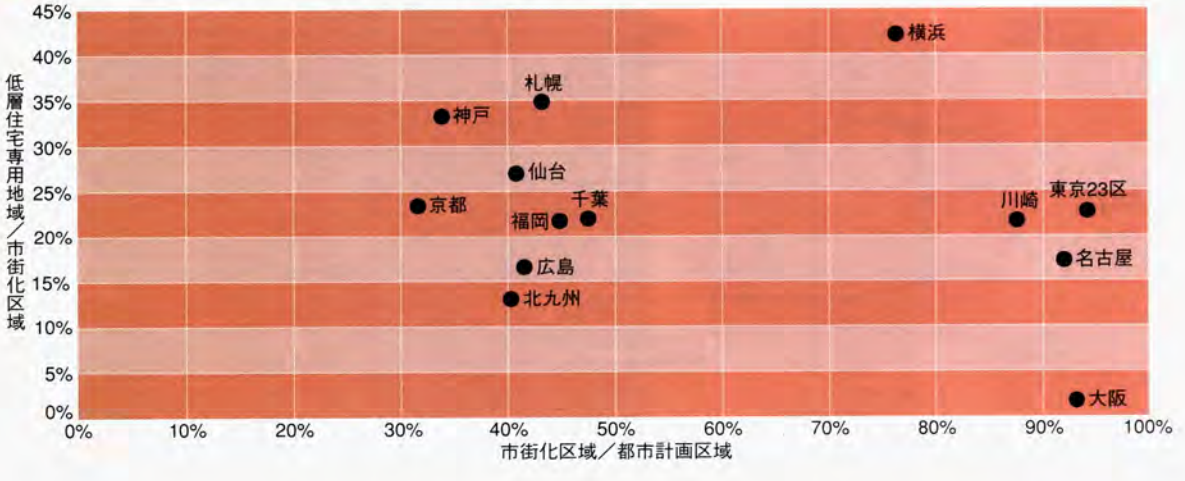
「利便性・選択性」の尺度

通勤・通学や買い物、余暇活動の便利さや選択性は、社会資源（働く場や商業施設、スポーツ・文化施設等）がどれだけ豊富に近くにあるかによってあらわすことができる。市民生活行動調査では、目的によってどの程度の時間をかけて移動しているのかがはっきりした傾向としてあらわれていた。たとえば、幼稚園や保育園は、15分以内が極めて多くなっている。

これまでの指標は、施設の数を対人口で割ってその数値を比較することが多かった。しかし、それでは利便性・選択性をあらわすことはできない。仮に、人口1万人のA町と人口300万人のB市の病院の利便性を比較してみよう。A町には1カ所の病院があり、B市には150カ所の病院があるとする。施設の量を対人口比で比べれば、B市の医療施設の水準はA町の2分の1である。しかし、A町はアクセスに平均15分かかり、B市は15分圏に3カ所の医療施設があるとすればどうか。A町の施設から15分圏内に住む人口は約半分でB市では施設から15分圏に9割がカバーされているのであれば、利便性と選択性においてはB市の方がすぐれていることになる。

今回の暮らしやすさ指標には、このような観点を入れ、利便性・選択性の尺度として施設の近さや密度をあらわすために分母を都市計画区域面積や市域面積とすることで他都市と比較を行った。また、施設から一定の距離内に居住する人口の割合や、駅からの一定の距離に含まれる施設の割合をあらわすことなどによって、市民にとっての利用のしやすさをみた。

●横浜市の土地利用と鉄道・道路網



●大都市の市街化区域の割合と低層住宅専用地域の割合